

白金蔭

Shiroganeyoshi



平成27年5月発行 第51号

白金葭定例会案内

月例会会報（¹⁵／5／15 8名欠2）（薔薇、苗売）

六月十九日（金） 12:00～15:00 ア第二 兼題：グラジオラス、鮎

七月十七日（金） 12:00～15:00 ア第一 兼題：鬼灯市、日盛

八月十五日（土） 10:30～17:00 吟行句会 炎天寺予定

グラジオラス、鮎の参考句（六月十九日分）

グラジオラス生れ付いての多血質

福島正明

グラジオラス一辺倒に咲きあたり

三宅静舟

真昼恋へはグラジオラスは濃かりけり

加藤今吉

グラジオラス群の夕立に輸血うく

中野旅籠

グラジオラス一方咲きの哀れさよ

村山古郷

刃のごとくグラジオラスの反りにけり

佐久間慧子

グラジオラス揺るるは誰か来るごとし

永田耕一郎

「天然風仕立ての鮎」と銘打つて

桑垣信子

ふるさととはよし夕月と鮎の香と

桂信子

セーラー服が帳場にかかり鮎の宿

井本農一

対岸の人の釣りあぐ鮎光る

佐々木溪水

山の色釣り上げし鮎に動くかな

原石鼎

掌にありて囀の鮎の鼓動聞く

飯田星史

握りたる鮎のちからが押し返す

中村正幸

激流を鮎の竿にて撫でてをり

阿波野青畝

鮎錆び候その首尾候

阿部完市

靴磨く児のすぐ向ひ苗市立つ

薔薇の垣亀の子束子干してある

薔薇の棘悉下を向く不思議

笹粽牡丹餅胃袋寸詰り

築地はも今年限りの初鯉

昼のビール象と鯨の骨を見て

薔薇窓に五月の日射傾きぬ

苗市や胡瓜の窓を想ひつつ

紅薔薇の靈氣^{オーラ}のなかの虻や蜂

船橋や歩廊^{ホーム}の下^の夏蕨

花びらの重なり捲れ薔薇開花

苗売の苗に吾が苗いつも負け

飯田孝三

増田陽一
2

光成高志

苗売に右顧左眄せず種を買ふ
禅と云ふ薔薇金輪際咲かぬかに
恩師の壕残る館山野分過ぐ

光 みち

早世の父の好みし夏の海
婚祝す歌に始まる薔薇の門
婚の荷に針箱加へスキートピー

松村幸一

苗売場キヤベツの好きな蝶来たり
愛子さまの名のある薔薇に近づきぬ
相似たりモーツアルトの髪と薔薇
段々に植ゑられ薔薇の祭かな
濡れし手をエプロンで拭く苗売女

吉羽多美子

つひにゆく道はわれにも業平忌
すこしほど香り無頼な野ばらかな
百歳までひとまたぎめく五月かな
五月人形綿を噴きたる鯉抱いて
大迷路なす魚河岸の薄暑かな

武者昭七

白玉や話のつきぬ姉妹
山つつじ駅長客と顔なじみ
薔薇の門より流れくるヴァイオリン
楠若葉下に鎮まる忠魂碑
苗売りの出て産土の月参り

倉田紀子

花散つて静寂^{しじま}の帰る花の山
バラ色のバラは一本だけのバラガーデン
バラの香にむせて一日^{ひとひ}の終りけり
苗売の声の消えて久しき町の辻
忠魂碑比島に果つと花の雨

浅野正美

腕組みて耳飾りして五月来る
食卓に算盤使ふ穀雨かな

孫の絵と届く花鉢母の日に
苗売の箱から選ぶ野菜苗

薔薇の花湯壺に浮ぶ旅の宿

苗売が木陰で休む黒き顔

咲き競う薔薇の花にも名前あり

青木啓泰

苗売のお店の帖場座敷にある

薔薇一本活けてあるなり法務局

自転車に茄子苗提げて買われ行く

胡瓜苗かぼそき蔓を巻いている

おれらしくない薔薇活け刺そのまま

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 苗売場キャベツの好きな蝶来たり

3 薔薇の垣亀の子束子干してある

3 相似たりモーツアルトの髪と薔薇

3 紅薔薇の靈気^{オーラ}のなかの虻や蜂

3 濡れし手をエプロンで拭く苗売女

2 婚祝す歌に始まる薔薇の門

2 祝婚の歌に始まる薔薇の門

2 苗売のお店の帖場座敷にある

2 笹粽牡丹餅胃袋寸詰り

2 山つつじ駅長客と顔なじみ

2 山つつじ駅長と客顔なじみ

2 すこしほど香り無頼な野ばらかな

2 薔薇の門より流れくるヴァイオリン

2 苗売が木陰で休む黒き顔

2 バラ色のバラは一本だけのバラガーデン

2 苗売の苗に吾が苗いつも負け

2 靴磨く児のすぐ向ひ苗市立つ

2 昼のビール象と鯨の骨を見て

1 苗売りの出て産土の月参り

1 おれらしくない薔薇活け刺そのまま

1 咲き競う薔薇の花にも名前あり

1 大迷路なす魚河岸の薄暑かな

1 自転車に茄子苗提げて買われ行く

1 愛子さまの名のある薔薇に近づきぬ

1 腕組みて耳飾りして五月来る

1 薔薇の棘悉く^{ことごと}下を向く不思議

1 薔薇の花湯壺に浮ぶ旅の宿

1 百歳までひとまたぎめく五月かな

1 薔薇一本活けてあるなり法務局

1 段々に植ゑられ薔薇の祭かな

1 苗売の声の消えて久しき町の辻

1 苗売の声の消えたる町の辻

多美子

幸一

多美子

正美

昭七

高志

孝三

陽一

多美子

啓泰

正美

幸一

啓泰

みち

紀子

孝三

正美

幸一

啓泰

みち

昭七

1

早世の父の好みし夏の海

1

苗売の箱から選ぶ野菜苗

1

つひにゆく道はわれにも業平忌

1

築地はも今年限りの初鯉

1

胡瓜苗かぼそき蔓を巻いている

1

孫の絵と届く花鉢母の日に

花散つて静寂^{しじま}の帰る花の山

婚の荷に針箱加へスキートピー

五月人形綿を噴きたる鯉抱いて

楠若葉下に鎮まる忠魂碑

禅と云ふ薔薇金輪際咲かぬかに

薔薇窓に五月の日射傾きぬ

食卓に算盤使ふ穀雨かな

花びらの重なり捲れ薔薇開花

バラの香にむせて一日^{ひとひ}の終りけり

苗市や窓の胡瓜を想ひつつ

苗市や胡瓜の窓を想ひつつ

苗売に右顧左眄せず種を買ふ

白玉や話のつきぬ姉妹

船橋や歩廊^{ホーム}の下^{ボトム}の夏蕨

恩師の壕残る館山野分過ぐ

忠魂碑比島に果つと花の雨

紀子

正美

幸一

孝三

啓泰

正美

昭七

紀子

幸一

多美子

高志

陽一

紀子

高志

昭七

陽一

高志

多美子

陽一

高志

昭七

一句鑑賞

光成高志

忠魂碑比島に果つと花の雨

昭七

楠若葉下に鎮まる忠魂碑

多美子

比島に果つと刻まれてある忠魂碑が花の雨の中に立っている。一月もたつと楠若葉の下に鎮座している忠魂碑もある。忠魂碑は日清日露戦争後建てられたものが多いが、掲句のは先の大戦での戦没者の霊を慰霊するためのものである。昭七さんの二人のお兄様が比島で亡くなられたと聞いた。今の若者では比島と言ってもわかるまいと呟かれた。無論フィリピン島のことである。花の雨の中といい、楠若葉の下といい、忠魂碑と共に戦没者の魂がそこにおられるように感じられるのではなからうか。以下は蛇足であるが、どうしてもここに書いておきたい。戦争初頭は比島の首都マニラを占領して米国のマツカーサーを豪州に逃げていかすほどの勢いがあつた。昨年亡くなられた流子さんは比島に向かって太刀風で出征された。私の生まれたのもその日であつた。その後、島々での戦いに敗れ敗れ、私のいとこはニューギニア島でまたまたいとこの父親はそのあたりの島で戦死、先に天皇が慰霊されたペリリュー島も玉砕、九段坂病院で知り合つた福迫さんはジャカルタ、スラバヤ、スンバワ島と転戦しているし、映画で見た硫黄島の玉砕、三月十日の東

京大空襲、宏之助さんの父親が亡くなられたあの空襲だ。そして、「ひめゆりの塔」を経て八月の「ひろしま」、私の記憶にある福山空襲のあの飛行機の爆音、そして長崎終戦と来た先の大戦。昨年、またいとはニューギニア慰霊団に参加して「行ってきたわよ」と私の家まで話しに来てくれた。そして、先週、館山で見た海軍航空隊の赤山地下壕、これは私の恩師もそして幸一さんも建設にかかわったとか、太平洋戦争は私の記憶を決して消さない体験なのである。芭蕉の軽みを追っかけている私です、戦争のことになるとその心が吹っ飛ぶのです。

一句鑑賞

武者昭七

山つつじ駅長客と顔なじみ

多美子

一時間に一本しか来ない単線の山あいの電車。駅員は駅長さんだけ。切符を売るのも回収するのも駅長さんの仕事だ。だから駅に来る人はみんな駅長さんと顔なじみ。「やあ、駅長さんお早うさん」「今日はどこまで行くだね」砂交じりのプラットホームには真赤な山つつじが花盛りだ。駅長さんが丹精して育てたものだ。みんなやさしく明るい駅長さんが大好きだ。電車が来るまでしばしの間、話の花が咲く。そんな情景が浮んでくる句である。「駅長」を主題にすえたのがいい。

すこしほど香り無頼な野ばらかな

幸一

バラといえは多くの人が豪華な西洋種のバラを思い浮かべる。変った人でも蕪村の可憐な「花いばら」を思い浮かべるのがせいぜいだろう。けれども作者は違う。少しばかり「無頼な香り」(なんとという個人的なとらえ方だろう)をあたりに放つ野ばらなのだ。野ばらはすねているのではない。「無頼なこと」が誇りなのだ。作者はそこに共感している。

笹粽牡丹餅胃袋寸詰まり

孝三

粽・牡丹餅と冒頭に並べたのは作者の好物だからだろう・腹いっぱい食べたいのだ。ところが作者の胃袋は残念なことに最近ぶちきられて(失礼!)寸詰まりというのが現状なのだ。そんな胃袋がなんとも情けないし、腹立たしいのである。叩きつけるような荒い語気(リズム)がそれを語る。

濡れし手をエプロンで拭く苗売女

みち

こういう句が僕らの郷愁を誘うのは「エプロン」も「苗売女」も「濡れた手をエプロンで拭く」という見慣れたしぐさも僕らの周りから急速に姿を消えつつあるからである。すべてがなつかしい。たくまずして過ぎ去った昭和の風物への挽歌となっている句である。

孫の絵と届く花鉢母の日に

正美

母の日に花鉢が届くのは今ではもう当たり前のように

なつてしまつたけれど、それに孫の絵が添えてあつたというのが喜びを二倍にも三倍にもしたのだ。花鉢以上の贈り物だ。母の日の幸せな母と娘と孫の一家。

一句鑑賞

飯田孝三

苗売の苗に吾が苗いつも負け

高志

東京近郊などでは家庭菜園や市民農園での野菜や花の自家栽培が盛ん、大概、定年退職後の人達が主役だ。高志さんもその一人、来年こそはいい花や野菜を作るぞ、とばかり、苗の育成から意気込むのだが、いざ出来ばえを比べりや、やつぱり苗売の苗には見劣り、去年も今年も。そりやあそうだ、なにせ相手は野菜や花卉栽培の「プロ」。自家栽培に勤しむ、にわか農夫は照れ笑ひして屈託ない。軽妙な口調が運ぶ、そこはかの諧謔が秀逸。「苗三連も目障りどころか、一々、苗を見比べるふうで面白

愛子さまの名のある薔薇に近づきぬ

みち

薔薇の名は、多々東西各界の名花に因むものらしいが、愛子内親王の名の薔薇があるとは知らなかった。戦後、皇族と国民が近くなつたのはいいことだが、時には口さないマスコミの標的にされる。それはそれ、はたと「プリンセスアイコ」なる薔薇に気づき、あら、アイコさんという薔薇だわ（あるいは、これが愛子さんの名の薔薇だわ）

と、思わず近づいて観賞する。出だし緩やかな平語調から一転、「近づきぬ」の古辞で締める緩急自在な詠いぶりは、銜いなく見事。日頃、一般の愛子さまへの親しみの情に適い、かつは、思ひかけずその名の薔薇を目にした驚き（昂り）にも呼応するだろう。花に寄る所作の一人が見えるようである。

百歳までひとまたぎめく五月かな

幸一

新緑眩い、風薫る五月、明るい太陽を浴び、清々しい大氣を胸いっぱい吸いこむ。百歳ももう一またぎだ、全身生気みなぎり、ふっとそんな思いが湧く。「めく」が絶妙。「ひよつとしたら」いや「きつと」の氣分をのせ、ちよつぱりはにかんで見せる態は、ほのと諧謔をかもす。元々、「めく」は他者をいう比喩の語、それを自称して涼し氣、こころ憎くも手練である。すなわち臍、呼応する、一步ならぬ一「跨ぎ」の歩幅にも参った。「かな」は年輪を負う、つくづくの述懐。因みに作者の幸一さんは、卒寿を過ぎて今に豐饒、壮者を凌ぐばかりでいらつしやる。

苗売の箱から選ぶ野菜苗

正美

「苗売」は野菜や草花の苗を籠に携えて町を売り歩く人。かつてその声や姿は初夏の風物詩だった。季語の本意はそこらにあつただろう。昭和三十年代頃からはすっかり途絶え、今では、苗は箱詰めされ、大抵は定日、そこに並んで売り捌かれる。産地から直に運ぶだけに、生

氣溢れる苗ばかりである。その中から好きなものを嬉々とじっくり選ぶ、そんな町の人たちの姿が目に見え。自家菜園や今やベランダのプランターでも栽培できるので、野菜はとくに人気だ。当世苗売風景の一齣である。

(出句一覽掲載順)

一句鑑賞―第49号―

飯田孝三

朝日照る浜一面に白子干す

昭七

出だし「朝日」照るに目をみはる。平談、冗語を容れず、目に物見せて、朝日みなぎる浜一面に広がる白子干しの光景を目前に繰り延べる。朝日漲る生気が清々しい。さらなる講釈はしよせん野暮だろう。

初蝶来座敷深くに紋付けて

みち

「紋付けて」が絶妙。上五に返る、「て」の軽やかな抜けつぷりは、さながら蝶の舞い。座敷の奥に通されるのはふつう賓客、さて、正装、どんな祝賀に来駕されたか。迎え入れる心の弾みがつたわる。はからずも家の中に舞いこんだ初蝶は紋白蝶を目にした、一瞬に膨らんだボエジの賜物である。「二つ折りの恋文が、花の番地を捜している。」『博物誌』『蝶』ルナル・岸田国士訳を思い出させる。

築地市場白子売場の清潔感

高志

結・端的「清潔感」が決まる。鮮やか。ところは築地

魚市場、近・遠海産鮮魚・冷凍魚、海産物の大市場。その耀りは内外業者、観光客を集めている。いわずもがな、魚市場は清潔さと活気が身上、魚身透く寸に足らぬ白子の売場に、一大生鮮市場の生気を見る、エスプリ潜む機微がおもしろい。むべ白子売場は新鮮、清潔さを象徴するスポットなのである。体言止め、漢字を連ねた句姿は句意に相伴し、簡明、正格。

みどり児の手の甲えくぼ桃の花

正美

「桃の花」の季語幹旋が見事。明るい春の日ざしに抱き上げられた、赤ん坊のふつくらしさにぎり拳が目に見え。女の子か。「桃の花」は倅いっぱい赤ちゃんの投影だろう。「手の甲にえくぼ」としたらどうだろう。中八音になるが口調は滑らか、笑窪がよりくつきり見える気がする。

(出句一覽掲載順)

ハガキ句(50報)管見

飯田孝三

ハガキ句五十報(09/10/19) 田中哲也追悼句

生前の手足と歩む秋景色 不憫

石拾ふ少年の眼や秋の昼 敏子

青茹の枝豆かへらざる人に 高志

男郎花言葉少なく逝きし人 裕子

花火の夜向うのホームに立ってゐし 春美

逝く夏のばしやんばしやんと餌して 多佳子

これが僕の骨だと夏の逝きにけり 陽一

蓮見舟一つの席をあけて置く 孝三

青茹の枝豆かへらざる人へ

高志

「俳句の人生がまだたつぷり残っていたのに……」、なぜだ。もっと「腹を割って話し合えばよかった」。「青茹の枝豆」に、俄かに早逝した故人への痛恨の惜情があふれて温かい。

生前の手足と歩む秋景色

不憫

生前の故人と歩く。手賀沼縁だろうか。連れだち歩く手が、足が眼の前だ。今にも語りかけてきそうだ。「手足」は愛惜の思いを具象して、切ない。「秋景色」に追憶一入の思いが滲む。

石拾ふ少年の目や秋の昼

敏子

ふと、石拾う少年の目が秋の日にきらとひかる。「や」は、その一瞬に感じるころである。秋の日のかがやきは、故人の人物、才気、詩才にも通うのだろうか、「秋の昼」が動かない。

これが僕の骨だと夏の逝きにけり

陽一

長年、故人と親交をもつ作者ならではの悼句である。深い歎きを伝える。現代長寿社会で、なお壮年を出ずに逝った。「夏」の胸懷の深さを知るべし。

逝く夏のばしやんばしやんと飴して

多佳子

「飴して」は、すなわち、尽くせぬ惜情である。

花火の夜向うのホームに立ってゐし

春美

去年の花火祭での別れである。向いホームに立っていた姿が眼裏を去らない。「向うのホーム」が、実景とはいえ、終の別れを暗示するかだ。「ゐし」が重い。

男郎花言葉少なく逝きし人

裕子

(巻石葉集) 男は、黙って処する。男郎花に故人の姿を重ねているのだろうか。

とくにこの頃、思うような俳句ができません。俳誌、新聞俳句欄などの掲載句にも、あまり感心しません。歳のせいでしょうか。先日、こちらの俳句勉強仲間に強く誘われ、足立区と荒川区の年次俳句大会に、それぞれ、初めて出てみました。前者には、広瀬直人が特別選者として招かれており、関心をそそりましたが、当日の氏の作品(選者も出句)、選句、講評ともに、全く、感じるところなし。以前、たまさか、氏の句に好感した覚えがあるのですが。地方地生えの俳句の雄というべきでしょうか。両大会を通じ、なるほど、いろいろな俳句がある、との実感を深めました。(駄句近作)

菊の香や昭和一杯ことさらに(文化の日) 小走りに下駄音帰る石路の花(一葉忌)

以上、遅ればせですが、先信の二番煎じの管見をお届けします。寒さが一入、悪い風邪も流行っています。ご夫妻のご自愛を切に祈りあげます。(平21・11・25)

お便り広場（到着順、敬称略）

前略いつも白金蔭誌をお送り下さり有難うございます。東日本大震災日に柴又で俳誌発行の企画のお話をうかがいましたが、はや五十号を数えるまでに成長しました。お目出とうございます。ご努力に敬意を表します。5/1の吟行は別の予定があり伺えません。4/29ならよかったです。貴兄萱退会の由、耳にしました。もし事実なら淋しい限りです。草々（4・21伊藤一艸人）（こんな所にお知らせするのも失礼と存じますが、末尾の文章は事実です。一艸人さんには不義理をしております。どうかご容赦を。本誌にて交歓できればと思います。高志）

白金蔭四月号頂きました。長屋さんの文章が載っていました。毎月手書きの句会報を頂いています。大正12年お生れでしょう。学士会館で西洋美術史の先生も亥年生まれで白石蔵王から杖について東京へ来ています。そして一時間二時間の授業をされます。大体私はねていますが。皆様の益々の御活躍を祈ります。今日は投票日です。（4/26 小山陽也）

みち様 過日は俳誌をお届け下さってありがとうございます。唱歌集や修身書めずらしいものも本当にありがとう。なつかしい歌もありつい歌ってみました。私が訪れたのは暑い時季で大きな木陰と漱石の家の静けさが印象

的でした。私の句を皆様が目にとどめて下さりうれしく思っております。とり急ぎお礼まで。（4/26倉田紀子）
光成高志様 先の例会では大変お世話になりました。久し振りあつという間のひと時でした。頂戴したお花は長い間楽しませていただきました。お蔭さまでその後も順調に経過しております。さて、築地市場吟行の件ですが、殊更、同市場吟行には絶好の時季で残念ですが、今回は自重して参加を見送らせていただきたく存じます。参加の皆様にもよろしくお伝えください。ご盛会を祈り上げます。右遅ればせで恐縮ですが、なにとぞ、ご了承下さいますようお願い申しあげます。草々

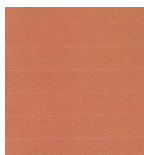
（4/28 飯田孝三）

お元気なようで何よりです。お訊ねの代赭色です。「小学館 色の手帳より」このところ三月には有志で京都へ、四月には彩の同人会で秩父の小鹿野町の春祭りと遠出の吟行へ行ってきました。高志兄の健康とご健吟を祈念しております。用件まで

哲学の道春水の緩と急

西陣

路地うらら地蔵堂また地蔵堂
絹の道堰きて秩父の春祭
舌焼くるほどの豚汁春祭



前略 連休に縁のない身ですが町中が静かな気がしておりますが、夏のような暑さには先行きが思いやられ閉口でございます。白金葎第50号、号を追って見応えある内容に感服いたしております。そして私めの書きましたものも掲載赤面ものがございます。さて、白金葎おすすめの投句、出来ましか否かは急げ者の常で、むずかしい問題ながら、皆々様のお作を拝見するのが楽しく又勉強にもなり頭の体操にもと存じ購読をお願い申し上げたく、とりあえず誌代一年分(27年)として六千円もお送り申しあげます。郵送料につきましてもお申し越し頂き、後便にてお送りするとうことで、ご了承ください承頂けますでしょうか。蛤、スカートビー、



笠鉦と小鹿野歌舞伎



兼題に皆様なかなかユニークなお句で楽しんでおります。焼蛤の香りが漂ってくる達者なお句に脱帽です。手紙のおしゃべりも好きなので長くなりますと誤字脱字とにかくご迷惑となりますので、この辺で句の評も失礼させて頂きます。何卒よろしくおねがい申し上げます。ごきげんよう

四月三十日

長屋璃子

白金葎4月号ありがとう。五月に入り道行く人それぞれに夏を感じます(元気でいます)。

ねぎぼうず そよ風に

空にむかって吹かれからむ

はじけてる 藤の花

夏野菜食べ切れないで花が咲く

(小松菜が)

(平成27年5月6日 榎田健三)

五月一日は超結社「末広句会」と重なってしまい、欠席して失礼しました。午後はボランティアで。築地市場はいかがでしたか。豊洲への移転でもめているようです。小生にとつて豊洲は思い出の地です。自動車学校に勤めていたことがあるからです。築地吟行会には半寿さんや飯田さんは参加したのですか！我孫子の句会や吟行会には、句会の重ならぬ限りは必ず参加させていただきます。右おわびまで (5/5 佐藤宏之助)

過日の築地吟行記録が本日届きました。いつものことながら手早いお仕事に恐縮です。ありがとうございます。

築地市場は一度行きたいと思いながら、一人では氣後れがしてただけに、大変貴重な経験をさせていただきました。魚介類の季語は春、夏どちらも沢山あり、おりからの晩春、それらが混在して賑やかでした。また、詠む対象が季語であるため必然的に一句一章となり、普段、二句一章の取り合せが多い小生にとって、その意味でも新鮮でした。8月15日の炎天寺吟行は、以前一人で行ったときは駅から相当歩いた記憶があるのですが、バスかタクシーで行くことになるのでしょうか。いずれにしても楽しみです。よろしくお願いします。奥様にもよろしく。

(5/7 仲本興正)

築地市場吟行の折はお世話になりました。二次会まで経験させて頂き、驚きと共に大変勉強になりました。季語を通して人生の「こまを認識する」ということ、目からうろこございました。多く読むことが詠むことにもつながるのですね。なかなか道遠ですが頑張りたいと存じます。有難うございました。(丹精のスナップエンドウおいしくいただきました)

(5/10 菊田比呂子)

前略 過日は、こいねいなお便りありがとうございました。又郵便切手も沢山に下さいまして厚顔しゅうございますが、ご芳志ありがとうございます。あのような会報で俳誌とも云えませんが、毎月お送り申しあげますのでお目まだるいとは存じますが、ご笑覧下さいますようお願い申しあ

げます。四月号で四名選句くださいましてありがとうございます。誌代の件は俳誌交換とは別途、私個人の意思として、ご了承下さいませ。かしこ何かと云うと買ったりした絵ハガキがどう使っても死ぬ迄使い切れないこと明らかなので、レターペーパー代わりに使ったりしております。お許し下さい。ますますの、健吟を願っております。(5/12 長屋璃子)

白金霞会費同封申しあげます。とり急ぎ。通信掲載痛み入ります。川柳憂さ晴らしです。でも金子もらっていただきますからね。

(5/14 青木啓泰)

会費同封致します。古代は別便です。神保町で一冊百円の古本屋さんが開店しました。三省堂東京堂も理工系のご発展を祈ります。毎日のおんびりしています。益々

(5/14 小山陽也)

新緑の鮮やかな頃となつて参りました。御元氣ですか。精励 俳道を極めておられること、思います。奥様も御活躍のこと、思います。私も元氣でおりますが、一日一日ゆっくり氣をつけて動作を行うようになって来ました。三浦さんが退職されたということ以外は変わったことなく同級生の皆さんお元氣の様子です。以前私の家の前の市営住宅の空地にやわらかな草が繁茂していました。が、犬の散歩でそばに行つてみたら明るい日差しの中、かすかな五月の風がそよいだと思つたら何かの小さな音がするので。よく乾いたからすのえんどうの茶色い莢が風

で次々はじけていました。静かな田舎の静かな草地で耳をすまさなければ聞こえないくらいいなしかし確かな音で種をとばしているのです。手にとると本当に小さいけれど、丸い茶色の一つの宇宙です。その時の句、「小さき種五月の風にはじけをり」今日も又犬の散歩でからすのえんどうを見つけましたがまだ中身は青い種で準備期間のようです。小さい種も毎年同じ種のようにだけれど同じ種ではないでしょう。小さいけれど生き生きと生きている。私も一日一日同じくり返しのようだけれど同じではないでしょう。生き生きと生きたいものです。お元気で。(鳥野豌豆の莢が同封)

(5/14 山本百合子)

(百合子さんこのような手紙がとうとう。この調子で自然を見つめながら生活されれば新しい発見にぶつかりますよ。俳諧のことで芭蕉は「只日々流行して日に新に又日に新なり」と言つたとあります。実人生をわたる心にも通じると思います。どうかあったって自然の方が偉大ですから、我々は気楽に生きればよいと思っております。「時が来て鳥野豌豆弾けたり」としたらいかがですか。因みに雀の豌豆もあります。高志)

コピアンでの席でみちさんの「段々に植ゑられ薔薇の祭かな」の「植ゑ」は「植え」の方が正しいのではありませんと申しましたが「植う」(基本形)はワ行下二段活用(ゑ・ゑ・う・うる・うれ・ゑよ)なので「植ゑ」が歴史的仮名づかいでは正しいものでした。余計なことを申しまし

た。失礼しました。(田一枚植ゑて立ち去る柳かな 芭蕉)

(5/18 武者昭七)

(私も言いましたのは、「田を植う」とした私の句を「田を植ゑる」にしなればと言う人があて困ったということでした。右のお手紙だと、私の方が正しいですね。)

いつもながら、五月例会ではお世話になりました。半日、時の経つのを忘れました。又々、ご夫妻で丹精された野菜を頂戴しました。有り難うございます。

まあなんと今年も戴きグリーンピース

埒もなき不陽気です。ご夫妻ともども御身ご大切に健吟ください。草々

(5・18 飯田孝三)

受贈誌 (H27年5月号)

花山葵天城の水の進む (彩122号)

平野ひろし

山繭を振れば生身の鈍き音 (〃)

〃

病床に蒔きどき等待種袋 (〃)

小泉 博

鬼の子の薄緑なる苔の蓑 (〃)

〃

伝法院通り抜けゆく羽子板市(飛行雲74号) 駿河岳水

病棟に髪刈られぬクリスマス (〃)

〃

決めてある後の志る古屋針供養(あすか5月号) 山尾かづひろ

理佳江

藍深き旅の土産の夏暖簾(東京クラブ5月)

璃子

牡丹の花の渦より小虫かな (〃)

〃

植物園莖ばかりを見てしまふ (リ)

輝子

こだま

現俳ブログ 223 ~ 224 城ヶ島

山尾かづひろ著

甘茶仏天井指す手曲げ給ふ

光成高志

人間は管切つて繋ぐ喇叭水仙

飯田孝三

俳窓評論纂

＊陽一さんより小笠原弘子句集「一樹」を頂いた。孝三さんのざっと見ではいい句が並んでいるとのこと。あと

がきよると、四年前のあの大地震の津波で松島市野蒜の家を流され皆失ったとある。私は石巻に仕事でよく行ったので、野蒜の中の仙石線をよく通りました。又私の上司が安蒜さんという方で、自分の名前を電話で知らせるのに苦労されていた。蒜山が中国山地にあるので、私はすぐ読めたし、ここ野蒜も確か運河があるということとで親しみがあつた。私は震災半年後、被災した石巻を訪ねて仕事の跡を見ました。途中の野蒜あたりで眺めた景色は「未枯れにあらで津波跡枯野なる」とメモしましたが、推敲する気にならなかった。取りあえず句を抜きます。

身ひとつの六十余日若葉寒

水無月や胸に言葉にならぬもの

夏燕記憶の底に在りし家

青蘆の揺らぎ一本ずつの弔旗
カシオペア西に傾く津波跡

身のうちに記憶の一樹小鳥来る

常長の解纜の地や秋夕焼

わずかなれど動く大陸涅槃西風

白金蘆はあの大地震の一週後に創刊したので、いつも創刊から四年とか思うとき、震災からも四年と記憶がよみがえります。デブリという怖い塊！まだまだ取り除くのに四十年もかかるのか。マグニチュード 9.0 の地震は忘れられるものではありません。

＊年取って導かれて今にあると思えて仕方ないので覚書として書いておく。それは、今に捨てずに持ってまわっているソーローの日記抄 (THOREAU, S. JOURNAL) である。学友と話してゐて出てきた教科書である。その著者がRH・ブライスである。それを今知ったのである。真栄寺での金子兜太の講演で時に出てくる名であった。ブライスに名著HAIKU四巻があるのだ。その中核をなすのが、芭蕉論である。そんなものがあることを73歳になって初めて知って、今に思えば十九歳からここに導かれてきたと思える。ベルグソンの記憶という魂が突然目の前に現れたみたいで、年を経るとこういう経験することが出来るのだ。百合子さんの手紙にあった俳道は、俳句道 (the Way of Haiku) と言う言

葉で出てくる。ソーローの言葉を引用して芭蕉は「男性のみに見られる女性的なもの」を持った男であるという。私は直感的に違ふなと思う。これを証明するのは大変難しいが、日本人論に突き詰めていかないとわからないと思う。ブライスは現代のキンドナルドさんのように以心伝心で伝わってきた日本人魂を風呂敷に広げてわかりやすく見せてくれる外国人ではないかと思う。これはあり難いことではあるがちよっぴり余計なお節介とも思ったりする。ここまで書かないでもいいことを書いてしまった。

恋の歌を読む

一

武者昭七

まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり
やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に 人恋ひそめしはじめなり
わがこころなきためいきの その髪の毛にかかるとき
たのしき恋の盃を 君が情けに酌みしかな
林檎畑の樹の下に おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと 問ひたまふそこひしけれ

明治三十年八月「若菜集」所収

藤村詩の中で最も広く愛唱された作品であろう。第一連から第三連までは初恋の回想であり（動詞がすべて過去

形である）最終連は「こひしけれ」と現在に残る心情をいう。

第一連。林檎畑の出会いである。まだ上げ始めたばかりの前髪に花櫛をさしたあのひとの印象のなんと美しく初々しかったことか。

第二連。わたしにやさしく手を差し伸べて薄紅色に色づいた林檎を手渡してくれた時のあの人の手の白さの震えるほどにまぶしかったこと。それが恋のはじまりであった。このあたり旧約聖書のアダムとイブ物語が影を落としていると同時に藤村らしい官能性も読みとれよう。

第三連は恋の成就をいうが作者は後にこの部分を削除したという（「早春」）。初恋の無垢なイメージにそぐわぬとみたためだろう。

最終連。林檎畑に今も残るあの頃のわたしの踏みあと。それは私の青春のかたみ。それなのにあの人は知らん顔して「あの踏みあととは誰がつけたのかしら」ととぼけるけれど、それでもやはり今も恋しいあのひと。おそらくこいびとは作者より世故にたけた年上の女性であろう。女性の心よりは男性のこころに初恋はのちのちまで濃い影をのこすものらしい。

芭蕉の軽み以後（37）

光成高志

竜宮も今日の潮路や土用干（上巳）

桃青

上巳は三月三日の桃の節句である。この日は年中最大の潮干といわれ、潮干狩りが盛んに行われる。さぞかし海底の竜宮城も姿を現して、土用干しをしていることだろう、というのである。竜宮の土用干しなどないことをあるように作意したおかしみが談林風な技巧なのである。まづ知るや宜竹が竹に花の雪（花）

桃青

名手宜竹が吹く一節切ひとよぎりの上に花吹雪が散りかかる。まるで宜竹の妙なる音色を、何よりも先ず花が知っているかのように。宜竹の一節切というのは尺八の一種で当代著名な一節切の名人であつた宜竹という固有名詞を使った発句である。二年後の延宝七年の句に

待つ花や藤三郎が吉野山

桃青

がある。藤三郎は宜竹の俗名であらう。こちらの句は俗名を使つて、咲く花を待つ心は、一節切の名手藤三郎が「吉野山」を吹く妙なる音色を待つと同じ思いだといふのである。この歌詞は「吉野の山を雪かと思れば、雪ではあらで、や、これの、花の吹雪よの」とあり、この歌詞の花の雪を効かしているのだ。

明日は粽難波の枯葉夢なれや（端午）

桃青

今日は端午の節句で粽を作るため難波の葦がもてはやされている。だが、明日になればそれも捨てられ枯葉同然となる。まるでではない夢だなあ。これは山家集の「津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風渡るなり」

のもじりである。難波は芦の名所である。鵜殿の芦焼きは今でも有名。粽は芦または真孤の葉で包むのが特徴だから、句に芦を省略しても誰でもわかるとして芦を抜かしてある。これは談林俳句でよく使う「抜け」の手法である。難波のことは夢とくると、西行の歌と共に、近世では秀吉の辞世まで思い浮かぶ土地なのだ。そこをよく心得た庶民的な句である。

我孫子日記

4/17	例会
4/19	教習所
4/20	免許センター
5/1	築地
*	5/6
*2	六本木
	5/8
*3	鎌倉
	5/12
	京橋
	5/13
*4	館山
	5/15
	例会

* 若鮎の互ひ違ひに並べ売る

高志

*2 夏来る遺作の下の遺影かな

〃

新人賞は妊婦の彫刻夏来る

みち

*3 鬼の子も蓑に顔出す案内所

〃

松手入文学館の前庭に

高志

*4 乗り来るは皆年寄りの菜の花号

〃

鯨飯食べて館山五月晴

みち

編集後記

お便りを沢山頂きお蔭でうまく編集できました。

白金霞 第51号 平成27年5月発行 編集・発行人 光成高志
(TEL & FAX 04・718・1068 発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17)
表紙の題字…加納綾女。写真5月21日のいつもと別な場所の白金霞